宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

高等学校における家庭科教育研究(2)：通信制家庭科教員へのアンケート調査結果

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 宮崎大学教育文化学部
	公開日: 2008-03-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石川, いずみ, 福原, 美江, Ishikawa, Izumi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/1411

宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学　第11号（2004）111－130頁

高等学校における家庭科教育研究（第２報）
―― 通信制家庭科教員へのアンケート調査結果 ――

石川いずみ*・福原　美江

A Study on Home Economics Education in Correspondence Courses of the Upper Secondary School（Ⅱ）

Izumi ISHIKAWA　Yoshie FUKUHARA

はじめに

第１報（本紀要、第10号、2004年３月）では、戦後の宮崎県立高等学校における通信制教育制度の発展と通信制教育課程と学習方法、及び通信制家庭科教育の現状等を明かにした。第２報では、全国の通信制高校の家庭科教員に対して実施したアンケート調査を分析し、現在の通信制家庭科教育の問題を把握し、さらに、2004年度から実施される教育課程における家庭科・科目「家庭総合」の「レポート課題」の構成案を作成する。研究方法は、アンケート調査と文献研究、及び聞き取り調査等である。

Ⅰ．全国通信制高等学校における家庭科教育の実態
－家庭科教員に対する調査を通して－

通信制課程に所属する家庭科教員に対して、通信制課程における家庭科教育の実態と課題等についてのアンケート調査を実施した。調査方法等は以下のとおりである。

１．調査方法

調査票は全国高等学校通信制教育研究会（以下、「全通研」と略称）に加盟している高等学校96校の家庭科主任教諭あてに郵送した。調査時期は2002年７月５日から７月30日で、回収数は52校、回収率は54％であった

①調査対象　96高校の家庭科主任教諭
②調査時期　2002年７月５日～７月30日
③調査方法　郵送調査法
④回収数　52高校（回収率：54％）

* 宮崎県立宮崎東高等学校教諭

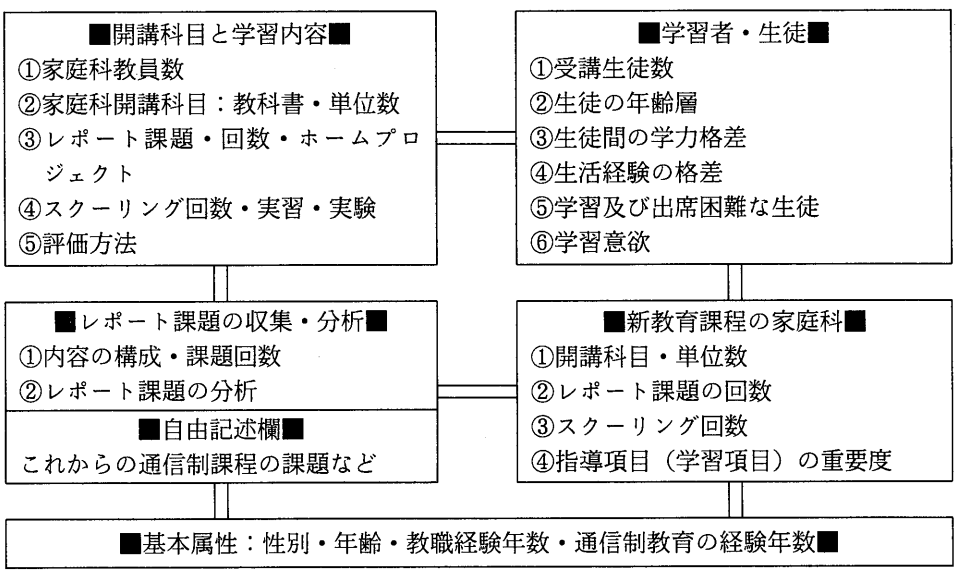
2．調査内容

調査内容の概念図は資料１に示した。まず、全国の通信制課程ではどのような家庭科教育が実施されているかについて、その現状を把握することにした。

とくに、現行制度における指導（学習）内容については、開講されている科目名、使用している学習書・副読本、実習・実験の内容、評価方法等について調査したほか、各高校が作成した「レポート課題」を収集し、それらの特徴等を分析した。

さらに、2003年度実施の新教育課程における家庭科指導（学習）内容について、新教科書「家庭総合」の目次を参考にして、「重要視する指導する項目」について調査した。その他、現在、抱えている問題点については、自由に記述してもらった。これらの分析と考察を通して、今後の通信制課程における家庭科教育の諸課題を鮮明にしたい。

資料１　調査内容の概念図：通信制家庭科教育の実態



3．調査結果及び考察

（１）調査対象者の基本属性

性別は、52名中、女性51名、男性１名。年齢構成は、20歳代４名、30歳代17名、40歳代12名、50歳代19名。教職経験年数は、５年未満３名、10年未満10名、10年から20年未満21名、20年から30年未満９名、30年以上が９名であった。通信制教育についての経験は、１年未満から13年まで幅広い分布がみられた。

（２）教員構成と教員数

各高校における家庭科の教員構成と教員数を資料３に示した。教諭のみの高校は13校、常勤講師のみの高校は２校、非常勤講師のみの高校は８校（15 %）であった。教員数が多い高校は、常勤講師や非常勤講師を含めての構成で、平均教員数は１校あたり２名であった。非常勤講師のみの高校は、レポート課題の添削指導のみに忙殺され、新しいレポート課題などの検討や作成等は時間外勤務になるためなかなか難しいと思われる。

資料２　基本属性

単位：名、（　）内は%、N＝52

性別	女性	男性	－	－	－
	51（98.0）	1（2.0）			
年齢構成	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	－
	4（7.7）	17（32.7）	12（23.1）	19（36.5）	
教職経験年数	5年未満	10年未満	20年未満	30年未満	30年以上
	3（5.8）	10（19.2）	21（40.4）	9（17.3）	9（17.3）
通信制教育の経験年数	3年未満	5年未満	8年未満	10年未満	10年以上
	17（32.7）	14（26.9）	13（25　）	3（5.8）	5（9.6）

資料３　家庭科の教員構成と教員数

N＝52

教員数	教諭のみ	常勤講師のみ	非常勤講師のみ	その他	教諭と常勤講師	教諭と非常勤講師	教諭と常勤と非常勤	常勤と非常勤講師
1名	9校	1校	6校					
2名	4校	1校	1校		1校	12校		1校
3名			1校			3校	1校	
4名						3校	3校	
5名						2校		
6名						1校		
7名						1校		
8名								
9名						1校		
合計	13校	2校	8校		1校	23校	4校	1校

（３）家庭科開講科目

現行の教育課程における家庭科開講科目は、資料４のとおりである。必修科目（４単位）では「家庭一般」が圧倒的に多く、家庭科専門科目のなかでは、「食物」が52高校のうち27校が開講しており最も多く、次いで２番目に多いのは「保育」である。

資料４　家庭科開講科目名

普通教科・家庭の必修科目		専門教科・家庭の選択科目	
科目名	学校数	科目名	学校数
家庭一般	49校	食物	27校
生活一般	2校	保育	11校
生活技術	1校	家庭経営	6校
		被服	6校
		家庭看護福祉	3校
		手芸	2校
		住居	1校

（4）家庭科教科書・学習書・副読本

①家庭科教科書・学習書について

現行の教科書検定制度では、検定周期は4年で、4年ごとに検定合格した教科書が発行される。各高校は、この改訂された教科書を採用するが、通信制課程では、新学習指導要領に基づいて作成され検定合格した最初の教科書を採用し、次期の学習指導要領に基づく教科書が発行されるまでのほぼ10年間、変更しないで使用している。

資料5　10年間の同一教科書使用について

これでよい	10校
4年ごとに変えたい	20校
2年ごとに変えたい	5校
その他	10校
無回答	7校

その理由は、新学習指導要領に基づいた新教科書が確定すると、その教科書に即して「全通研」編集による「学習書」が作成されているため、4年ごとに学習書を作成することができないからである。このように、同じ教科書を10年間にわたって使い続ける現行の教科書採択・使用の実態に対しては、資料5のような回答がえられた。学習書については、52校のうち43高校（83%）で使用されていた。

なお、教科書及び学習書は、それぞれの高校で独自に採択して決めている高校もあり、とくに学習書は強制的に購入する必要はないことが明らかになった。その他の意見として、それぞれの学校の実状に合わせるべきではないか、毎年変わるのは大変だと思うが1年間の使用後は再検討してもよいと思う、という意見もあった。しかし、変化の激しい現代社会においては、新しい内容が加わる家庭科としては、同じ教科書を10年間近く使い続けることには望ましいとは考えていないが、教科書を変更すれば、その都度、レポート課題の内容を教科書に合わせて作成し直し、学習書も独自に作成することになり、家庭科教員の負担が大きい。

一方、現在は学習書に代わる多用な資料集が、各出版社から多数刊行されていることから、今後は、「全通研」指定の教科書と学習書は使用しないで、各高校にふさわしい教科書と学習資料集を独自に採択し使用していくことも考えたい。

②副読本について

副読本（生徒用資料集）については、各高校が任意に指定しているが、回答校14校で23種類が使用されていた。その一覧は資料6のとおりである。これによると、食品成分表がもっとも多く10校で使用されている。その他では、いわゆる「家庭一般」教科書の全章を網羅した生徒用資料集が採用されていることが明らかになった。

資料6　副読本（生徒用資料集）一覧

＊は成分表

	副読本名		使用学校数
普通科目（家庭一般）	ワイド家庭科　資料＆成分表 ＊	一橋	1校
	図説家庭科資料集	実教	1校
	2002資料家庭一般	実教	1校
	ニューライブラリー家庭科	実教	2校
	ニュービジュアル家庭科	実教	1校
	おとことおんなの生活学	NHK	1校
	家庭一般	NHK	1校
	資料家庭一般	法規文教	1校

	成分表 ＊	女子栄養大出版	１校
	データーネット家庭科学習資料集	教育図書	１校
	調理実習ノート	教育図書	１校
専門科目	新食品成分表FOODS（食物）＊	一橋	１校
	６４６食品成分表 ＊	一橋	１校
	民法の解説・家族法	一橋	１校
	カラーグラフ五訂食品成分表 ＊	実教	２校
	ニュービジュアル家庭科	実教	１校
	新選食品成分表 ＊	実教	２校
	家庭看護福祉	実教	２校
	ビジュアルワイド食品成分表 ＊	東書	１校
	改訂生活一般学習ノート	東書	１校
	私たちと家庭生活	とうほう	１校
	カラーチャート食品成分表 ＊	教育図書	１校
	テーマスタディ資料家庭科（家庭経営）	東書	１校
	成分表 ＊	女子栄養大出版	１校
	21世紀へのセクソロジー（保育）	一橋	１校

（５）ホームプロジェクトとスクーリングについて

①ホームプロジェクトの位置づけについて

「レポート課題」におけるホームプロジェクトの位置づけについてであるが、宮崎東高校は「レポート課題」の最後に「実践活動」として実施している。調査結果では、ホームプロジェクトを「実施している」高校は11校で、その場合は宮崎東高校と同様にレポートの中で実施しているが、「実施していない」高校が多く41校で、79％を占めている。

ホームプロジェクトは、本来、課題解決型の学習であるので、家庭科学習においては有効な学習方法であるが、課題解決には至らないレポートが多く、その指導に苦慮している。このような実態を克服するためには、生徒にその有用性を説明し、事前指導と中間指導を充実させて、通信制課程の学習方法としてさらに取り組んでいきたい。

②スクーリング（面接指導）について

家庭科必修科目（ほとんどが「家庭一般」４単位）におけるスクーリングの回数は、資料７の通りで８回がもっとも多く、52高校中の25校である。なお、宮崎東高校は４回（その他に、放送視聴代替時数は３時間）である。

資料７　必修家庭科「家庭一般」のスクーリング実施回数

スクーリング回数	４回	６回	８回	10回	12回	13回	14回	16回	22回	24回	32回	合計
該当高校数	3	1	25	6	10	1	1	2	1	1	1	52

③実習・実験の内容について

通信制課程における実習・実験は、スクーリングで実施されるが、スクーリング回数が少な

い現状では無理という意見が多い。しかし、今回の調査では、実習・実験を実施している高校は、52高校中39校で75%にあたる。その内容は、資料8に示したように、食物関係が多く、次いで被服関係の実習・実験である。全日制普通科における家庭科の場合も、実習は食物関係が一番多く、通信制課程でも同様の傾向であった。

「自由記述」の意見をみると、家庭科教員は実習に対しては肯定的な傾向が窺える。しかし、家庭科教員が実習・実験を導入する意思を持っていても、現実的にはなかなか実現できないことも多い。実習施設は全日制課程の施設ほど十分に整備されていないが、実習室を使う実習・実験だけではなく、普通教室でも実施できる実験的な実習を加えると、さらに実習内容を充実させることが可能になると考える。

ただし、実習・実験の内容に対する家庭科教員の意識は、年2回の調理実習でも多すぎるという学校もあれば、年3回の調理実習でも少し足りないという学校もある。また、調理実習と被服実習（基礎縫い）の2回でも適切と考えている学校や、調理実習と被服実習（刺繍）を行っている学校では、刺繍のみの実習だけでは不足という学校もある。

このように、同時間数または同じ内容の実習を行っていても、それぞれの教員で実習に対しての考え方が異なっている。生徒が実習を体験できる機会に恵まれるかどうかは、家庭科教員の考え方に依拠することがわかる。

資料8　家庭科必修科目における実習・実験の内容（複数回答）

実　習		学校数	実　験		学校数
食　物	調理実習	32	食　物	糖度、乳化と分離など	7
被　服	刺繍、基礎縫い、編み物など	22	被　服	染み抜き、洗剤など	9
福　祉	高齢者疑似体験、車椅子体験	2	保　育	布おむつと紙おむつ	1
保　育	保育人形	1			
住　居	インテリア計画、間取りの設計	2			
その他	マーケットリサーチ、折り紙	3			

（6）学習の評価方法

レポートの内容が合格点に満たない場合の対処法、及びテストの回数は資料9の通りである。レポートについては、ほとんどの高校が合格できるまで再提出させている。

資料9　評価方法　N=52

不合格レポートの対処法		テストの回数	
再提出させる	46校	年間で1回	1校
校不合格にする	1校	前期と後期で2回	35校
その他	2校	年間3回	6校
無回答	3校	年間4回	9校

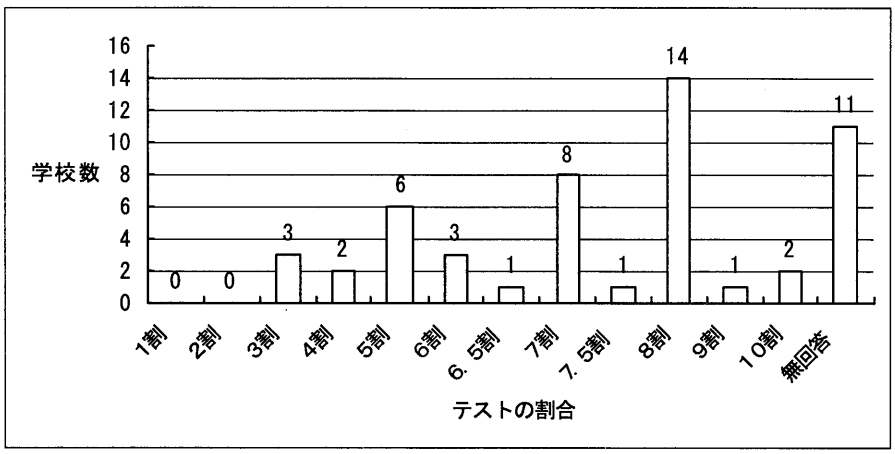
また、テストの回数は、前期1回、後期1回の計2回の高校が68.6%を占めている。

学年度末の総合評価については、レポートとスクーリング態度、及びテストの3つについて、どのような割合にしているかを調査した結果、とくにテストの割合（重み）は、資料10のとおりで、テストの占める割合は8割としている学校が14校と最も多く、次いで7割が8校あった。

すでに述べたように、宮崎東高校は、学年度末の学習評定は、レポートを5割・テストを5割で算出しているが、この根拠は、日々のレポート学習に重点をおいてもらいたいと考えての

ことである。今後は、テストよりもレポートの割合を高くしていくことも考えていたので、テストの点数に重みをおいている本調査結果は、予想しがたいことであった。なお、スクーリングの態度については、23校が１割から２割程度の重みで評定に加えていることが分かった。

資料10　総合評価におけるテストの割合（重み）



（７）生徒の学力差等

通信制課程の生徒は、すでに述べたように入学生、編入生、転入生に分けられ、さまざまな年齢や職歴、生活経験を持った生徒である。そこで、以下の点について調査した。

①生徒間の学力の差が大きいと感じたことはあるか　【問　７】
②生徒間の生活体験の違いが大きいと感じたことはあるか　【問　８】
③各科目のレポートは学力別に作成されているか　【問　９】
④レポートは提出するがスクーリングには出席困難な生徒はいるか　【問　10】

生徒間の学力差及び生活体験の格差が大きいと回答している高校は、46～47校であるが、その一方で、レポート課題は学力別には作成していない高校が45校もあり、学力差に対しては全く対応できていない。

このような問題を解消する方策として、一つは、現在は、年度始めに前期と後期の１年間分のレポート課題を渡しているが、前期が終わった時点で後期分のレポートを渡すようにすれば、後期からは学力別のレポートを課すことができる。また、二つ目の方策は、レポート課題を基礎編と中級編に分け、ニーズに応じたレポートを作成する方法がある。

スクーリングに出席できない生徒のいる高校は40校あり77％を占める。その生徒への対処方法は、様々な手だてが行われているが、夏期休業中に補講として個別にスクーリングをしている高校が多かった。また、テレビやラジオ視聴を認めている高校も多かったが、これはスクーリング時数の１／２までしか認められないので、単位認定までに至らない。

資料11　生徒の学力差など

N=52

	①生徒間の学力差の有無	②生徒間の生活体験の差	③学力別によるレポートの有無	④出席困難な生徒の有無
は　い	46校（88.5）	47校（90.4）	2校	40校（76.9）
い　い　え	3校	1校	45校（86.5）	8校
無　回　答	3校	4校	5校	4校

（8）2003（平成15）年度からの新教育課程について

①家庭科開講科目とレポート回数

新教育課程では、家庭科の科目名と単位数の変更が行われた。新科目「家庭総合」は4単位、「家庭基礎」は2単位、「生活技術」は4単位である。また、専門科目名の名称も変更された。

新教育課程における家庭科の開講科目は、資料12のとおりである。必修の開講科目で、一番多かったのは「家庭総合」で、「家庭総合」「家庭基礎」「生活技術」が複数開講される学校もあった。また、必修科目のレポート回数は、4単位科目で12回が最も多く18校である。、次いで8回の高校が8校で、未定も8校あった。この調査時期は2002年7月末で、各高校ともに次年度のカリュキュラム内容は検討中であり「予定である」ことが付記されていた。

資料12　家庭科開講科目名

普通教科・家庭の必修科目		専門科目（選択科目）	
科目名	学校数	科目名	学校数
家庭総合	42校	フードデザイン	20校
家庭基礎	9校	発達と保育	12校
生活技術	1校	消費経済	5校
無回答	5校	服飾文化	3校
		家庭看護福祉	3校
		服飾手芸	1校
		食文化	1校

②「家庭総合」（4単位）における指導内容の重要度

宮崎東高校では、2004（平成16）年度から「家庭総合」（実教出版）を開講するため、この教科書に基づいた「レポート課題」を作成する必要がある。そこで、レポートの課題作成に当たっての示唆を得るために、各高校で重要視したい指導項目について、家庭科教員の意見を尋ねた。調査は、指定された「家庭総合」の目次から、各項目ごとに「重要」「やや重要」「重視していない」の3段階で選んでもらった。

さらに、同じ項目で宮崎東高校生徒にもアンケートを実施したので、教員側のもとめる指導内容と、生徒側の期待する学習内容について比較考察しておきたい。なお、生徒に対する調査は、以下のように実施したが、生徒の回答は20名で、少数のため参考的な数値として考察した。

①調査対象者：「家庭一般」の既習生徒で、選択科目「食物」の履修生徒80名

②調査方法　：自記式で郵送法と留置法（スクーリング時に回収）

③調査時期　：2002年10月１日から11月17日
④回収数（回収率）：20名（25％）

資料13（次ページ）は、「重要と思う」と考えている項目の、教員と生徒の割合である。

まず、教員及び生徒ともに回答者の50％以上が「重要」と考えている項目は、以下の７項目であった。

- 「家族ってなんだろう」
- 「生命の誕生」
- 「栄養と食品とのかかわり」
- 「食品の選び方と安全」
- 「これからの食生活を考える」
- 「消費者の権利と責任」
- 「資源・環境を考える」

また、教員の50％以上が「重要」と考えているが、生徒にとっての重要度はやや低い項目は、「よりよい衣生活を創造する」（生徒は35％）と「健康で安全な住まいの環境」（生徒は45％）の２項目であった。 反対に、教員と生徒の重要度が20％以上乖離している項目は、以下の７項目であった。

- 「パートナーと出会う」
- 「心身のゆたかな発達」
- 「子どもの生活を知る」
- 「食生活をデザインする」
- 「私たちの衣生活」
- 「衣服をつくろう」
- 「人と住まいのかかわり」

以上の結果から、「家庭総合」の内容では、教員も生徒も、家族、生命の誕生、食物・栄養、消費生活、資源・環境などを重視していることが明らかになった。

（９）「家庭一般」レポート課題について

本調査で収集した19校の2002年度版「家庭一般」（４単位）の「レポート課題」について考察しておく。

①レポート課題の回数

レポート課題の回数は、生徒にとっては学習内容の量的・質的側面に関連する。まず、アンケート調査結果から、４単位の「家庭一般」を開講している49校のレポート課題について、年間回数を紹介すると資料14のとおりである。

４単位の「家庭一般」で、最も多いレポート回数は12回で、26校が該当する。最少では６回、最多回数は16回という大きな格差がある。ちなみに宮崎東高校は10回である。

資料13　重点的に学習させたい・したい項目

	項　　目	教員側から（44名中）			生徒側から（20名中）		
		重要	やや重要	重視しない	重要	やや重要	重視しない
人の一生と家族	自分をみつめる	39%	41%	6%	50%	50%	0%
	生きるということ	49%	35%	2%	50%	45%	5%
	青年期を生きる	43%	43%	2%	50%	50%	0%
	パートナーと出会う	22%	55%	12%	45%	55%	0%
	家族って何だろう	51%	37%	0%	50%	50%	0%
	家族と法律	39%	49%	2%	40%	55%	5%
	生活をささえる仕事と生活時間	27%	55%	4%	50%	40%	10%
保育	みんなで育てる	45%	39%	4%	65%	30%	5%
	生命の誕生	65%	25%	0%	65%	30%	5%
	心身のゆたかな発達を	49%	39%	0%	70%	25%	5%
	子どもの生活を知る	24%	63%	2%	65%	30%	5%
	すべての子どもがすこやかに	49%	41%	0%	55%	40%	5%
高齢者と福祉	高齢社会に生きる私たちの暮らし	41%	43%	4%	50%	50%	0%
	歳を重ねるということ	27%	55%	6%	45%	55%	0%
	高齢者が自立するために私たちができること	49%	39%	2%	50%	50%	0%
	ゆたかな高齢期をむかえるしくみ	43%	49%	0%	50%	45%	5%
	ささえあう暮らしとは	41%	49%	0%	40%	55%	5%
	地域で暮らす、みんなで暮らす	37%	45%	4%	35%	60%	5%
生活の科学と文化	生活文化の伝承と創造	27%	55%	6%	20%	75%	5%
	人と食物のかかわり	45%	37%	2%	45%	55%	0%
	栄養と食品のかかわり	75%	16%	0%	60%	40%	0%
	食品の選び方と安全	73%	16%	0%	65%	35%	0%
	食生活をデザインする	39%	43%	4%	60%	35%	5%
	これからの食生活を考える	53%	33%	2%	55%	40%	5%
	人と衣服のかかわり	22%	59%	4%	40%	50%	10%
	私たちの衣生活	12%	65%	8%	35%	55%	10%
	衣服は何からできているのか	31%	55%	2%	30%	65%	5%
	よりよい衣生活を創造する	53%	33%	0%	35%	65%	0%
	衣服をつくろう	10%	47%	25%	35%	55%	10%
	人と住まいのかかわり	16%	65%	6%	30%	65%	5%
	快適な住まいづくり	41%	47%	2%	25%	65%	10%
	健康的で安全な住まい環境	59%	29%	0%	45%	50%	5%
	住環境と地域環境	41%	41%	4%	30%	65%	5%
	よりよい住生活を創造する	20%	55%	8%	30%	70%	0%
消費生活	主体的な消費行動	39%	47%	2%	55%	45%	0%
	消費者の権利と責任	67%	20%	2%	70%	30%	0%
	資源・環境を考える	73%	18%	0%	65%	35%	0%
	経済のしくみを知る	35%	51%	0%	50%	45%	5%
	計画的にお金を使う	45%	39%	2%	60%	35%	5%
	生活設計	43%	35%	4%	50%	50%	0%

資料14　レポート課題「家庭一般」の年間回数

N=49

年間レポート回数	6回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	16回	合計
該当高校数	1	10	1	7	1	26	2	1	49

（注）７回、14回の該当高校は無し。

②レポート課題の内容構成

一方、収集した19校の「レポート課題」の内容構成を、「全通研」指定の教科書「家庭一般」（伊藤セツほか、実教出版、教科書番号538、1997年検定）の項目と対応させて検討したのが資料15である。この結果から、19校のすべての高校が組み入れている項目は、「家族と家庭」「高齢社会と社会福祉」「青年期を生きる」「生命の誕生」「衣服と人間」「衣服と素材」であった。

次いで18校が組み入れている項目は、「生活時間」「家庭の経済」「消費生活と消費者」「子どもの生活・環境」「栄養素と摂取量」「食品の特質と選択」「衣生活の管理」「住まいと人間」「住宅問題」「快適な住まいづくり」で、17校が組み入れている項目は「労働」「献立と調理」であった。低い項目は、「食物と人間」が10校、「衣服製作」が７校、「調理実習の記録」が５校、「生活設計」が１校であった。新聞記事を貼付させているのは９校であり、放送視聴の「感想」は２校であった。

③レポート課題の特徴

前述の19校のレポート課題のなかから、次章で作成する「家庭総合」に参考になると思われる７校のレポート課題の特徴について資料16に要約しておく。

資料15　レポート課題の内容について

（単位：学校数　N=19）

内容構成	学校数
1．家庭経営	
ア）家族と家庭	19
イ）高齢社会と社会福祉	19
ウ）生活時間	18
エ）労働	17
オ）家庭の経済	18
カ）消費生活と消費者	18
2．保　育	
ア）青年期を生きる	19
イ）生命の誕生	19
ウ）子どもの生活・環境	18
3．食生活	
ア）食物と人間	10
イ）栄養素と摂取量	18
ウ）食品の特質と選択	18
エ）献立と調理	17
オ）調理実習の記録	5
4．衣生活	
ア）衣服と人間	19
イ）衣服の素材	19
ウ）衣生活の管理	18
エ）衣服の製作	7
5．住生活	
ア）住まいと人間	18
イ）住宅問題	18
ウ）快適な住まいづくり	18
6．生活設計	1
7．ホームプロジェクト	7
8．新聞記事	9
9．放送視聴の記録	2

資料16　7校のレポート課題の特徴について

① 岩手県立A高校
全12回の課題の中で4回分が家庭経営分野。その内の3回分は「チャレンジ」と称して、内容に関連した新聞記事を貼付させ、その記事に関する考えを述べさせている。

② 千葉県立B東高校
他校のレポート課題の設問が全体的に空欄回答方式（穴埋め方式）が多いなかで、「・・・・についてまとめなさい」「引用して説明しなさい」「使う理由を書きなさい」など、自分で考えて自分の言葉で文章を記述していく形式が多く採用されている。また、普段の生活の中から様々な調査をして記入していく項目が必ず組み込まれていたり、新聞記事や広告を使って感想を記入させるなど、「生活力の形成」に配慮した問題になっている。

③ C学園高校
レポート作成のなかで、NHKテレビ放送「おとことおんなの生活学」の視聴が義務づけられており、毎回のレポートに視聴課題があり、それを中心に感想を書く欄が設けられている。通信制課程は自学自習が学習の中心であるため、放送視聴により学習内容の理解も良くなってくる。また、孤独になりがちな自宅学習にリズムをあたえ、継続的な学習を促す長所がある。全体的にレポートの問題数は多くはないが、ポイントをうまくしぼった内容で構成されている。

④ 山梨県立D高校
作問の方法が、空欄回答方式と記述方式のバランスがとてもよく取れているレポートである。また、教科書学習書をただ写すのではなく、日常生活で頻繁に使用される語句などを「説明しなさい」という問題も多く取り入れている。特に、調理と被服の実習の在り方について、示唆を得ることができた。調理実習の記録では、必ず実習した料理と自分自身を入れて撮影した写真を貼付させて提出させている。調理実習をこのような方法で行えば、スクーリング時に調理実習に参加しなくても自宅で調理をする機会が生まれる。また、被服の基礎縫いでは、「技術検定4級」の指定された図案入りの布を利用している。この実習を契機に、興味や関心が芽生え、通信制課程の生徒でも技術検定の資格取得に挑戦できるのではないかと考えている。

⑤ 三重県立E高校
全13回の回数があるために、全体的に幅広くレポートをまとめ作成している。保育分野に関するレポートは3回分もあり、特に力を入れていることがわかる。男性の家事・育児参加について言及し、現代の子どもの遊び方や児童憲章については、〈意見・感想〉を記載するように求めている。

⑥ 滋賀県立F高校
1回のレポートがB5判で5～6ページあり、レポートの全回数は13回である。したがって、レポート総数が38ページで19高校のうち最も多いレポートである。作問は、教科書を読んで書き写していく内容が多い。

⑦ 岡山県立G高校
B4判の横書きの2段組・B5サイズで作成され、全32ページである。文字の大きさ、文字数、イラスト、図表などのバランスがよく、見やすく記入しやすいレポートである。レポート課題全11回のうち4回は、NHKテレビ放送「おとことおんなの生活学」を視聴してその感想を記載する欄がある。

（10）通信制課程における家庭科教育の課題－自由記述を中心に－

最後に、「通信制教育における理想像」及び「貴校で充実させたいこと」など、自由に記述していただいた。42校の記述内容から、通信制家庭科教員は、いま、どのような課題を抱えているか考察しておく。記述内容は、以下の７項目にわけて整理した。

①学習内容について
- 充実したレポートもある
- 生活に生かせる授業内容にしたい
- 学力差に応じた学習内容の充実
- 各種の資格取得に向けて指導：パソコン、簿記、ペン習字、和裁、着付け等の検定
- 地域での実習や体験を取り入れたい
- レポート添削を丁寧にしたい
- レポート課題の精選、意欲的に取り組むレポートの作成
- 授業用プリントを充実させたい
- 考える力をつけさせたい
- 生きる力に結ぶつくレポートやスクーリングにしたい
- 年齢別の授業科目があってもよい
- 自分で考え、解決できるレポート課題にしたい

②学習方法（実習・実験・スクーリング等）について
- 実験・実習を多くしたい
- 実習を増やしたいが教室がない
- メールやパソコンを利用した質問など双方向から授業
- 実験・実習の重要性、実験・実習の充実
- 生徒の感想・意見等をまとめ、「家庭科だより」をだしている
- 生徒との交流を重視する、生徒とのふれあい
- 被服実習は教材の集金方法など問題もあるので不要
- 放送教育や情報機器を充実したい

③生徒について
- 年齢、生活体験の異なる生徒なので、一人一人の生徒に適した教育をしたい
- 生徒の定員を守ってゆとりのある指導をしたい
- 年齢や生活体験の格差がるので生徒把握が難しく理解度に差がある

④学習環境：予算、教室の施設・設備
- 全日制と共用のため独立校舎がほしい。
- 予算や教員数への配慮
- １学級あたりの生徒数を少なくする

⑤教員について
- 専任教員がいない
- スタッフとスクールカウンセラーの配置

⑥入試・卒業
- 入学者全員の卒業を望む

⑦通信制課程の独自性（長所・短所を含む）

・チャータースクールの実施やインターネットを利用したスクーリングにしたい
・異年齢による学習のメリット
・スクーリングを多くして充実させたい
・通信制高校の増設

これらの記述内容からは、教育課程に関しては、生活体験や年齢差に応じて、「生徒が意欲的に取り組めるレポート作成」を指摘する高校が多く、実験・実習を組み入れたスクーリング、通信制教育課程のメリットをさらに生かした学習方法やスクーリングのあり方等が自覚されている。その一方で、全日制課程に比べて、教室や教員の不足、定員オーバーの学級等も指摘されている。

Ⅱ．宮崎東高校における家庭科レポート課題の作成

1．「家庭総合」レポート課題作成の基本視点

宮崎東高校では、各教科・科目のレポート課題の作成にあたっては、以下のような留意点を掲げている（「平成14年度版　通信教育実務提要」17ページ）。

（a）生徒の学習状況・学力を考慮する。
（b）分量や難易度については、生徒の負担が著しく過重となり、学習意欲をそぐことのないように配慮する。
（c）学力の差を考え、課題の配分をする。（学力の高い生徒のため、程度の高い課題も一部加えることも考えられる）
（d）１回分の分量は、１～３枚とする。
（e）問い方はできるだけ平易にし、また答えやすくする。
（f）教科書の他、学習書を見て答えるような問題も加えることが望ましい。
（g）回答欄が狭くならないよう留意するとともに、添削のための余白も設けておくことが望ましい。

以上の一般的な留意点のほかに、「家庭総合」（４単位）のレポート課題作成にあたっては、新設科目の独自性に配慮して作成する必要がある。そのために、まず「家庭総合」の目標と各内容のねらいを紹介しておく。

●目標

人の一生と家族、子どもの発達と保育、高齢者の生活と福祉、衣食住、消費生活などに関する知識と技術を総合的に習得させ、生活課題を主体的に解決するとともに、家庭生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。

●各内容のねらい

（1）人の一生と家族・家庭

人の一生を生涯発達の視点でとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させ、男女が相互に協力して、家族の一員としての役割を果たし家族を築くことの重要性について認識させるとともに、各自の生活設計を考えさせる。

（２）子どもの発達と保育・福祉

子どもの発達と保育、子どもの福祉などについて理解させるとともに、子どもの健全な発達を支える親の役割と保育の重要性や社会の果たす役割について認識させ、保育への関心をもたせる。

（３）高齢者の生活と福祉

高齢者の心身の特徴と生活、高齢者の福祉などについて理解させるとともに、介護の基礎を体験的に学ぶことを通して、高齢者の自立生活を支えるために家族や地域及び社会の果たす役割について認識させる。

（４）生活の科学と文化

衣食住の生活を科学的に理解させるとともに、衣食住に関する先人の知恵や文化を考えさせ、充実した衣食住の生活を営むことができるようにする。

（５）消費生活と資源・環境

家庭の経済生活、消費者の権利と責任などについて理解させるとともに、現代の消費生活の課題について認識させ、資源や環境に配慮し、消費者としての適切な意志決定に基づいて、責任をもって行動できるようにする。

（６）ホームプロジェクト

生活の中から課題を見いだし、解決方法を考え、計画を立てて実践できるようにする。

出典：文部科学省『高等学校学習指導要領』1999年３月

このような目標をもつ「家庭総合」の特徴は、以下のように指摘することができる。

第１は、「人間の発達」と「福祉」の視点を重視した内容で、乳幼児から高齢者までの「人の一生」を視野にいれて、家族・家庭や少子・高齢社会をとらえているところに特徴がある。とりわけ、「高齢者の生活と福祉」は、前回の「家庭一般」の内容に比べると、章立てを独立させている。

第２は、衣食住の生活を一括して「生活の科学と文化」として統合し、「先人の知恵や文化を考えさせ」る内容が新たに導入されたことが大きな変更点であるが、衣食住のなかでも、特に、栄養及び食生活と健康等に重点をおいている。

第３は、消費生活と「資源と環境」の内容を統合したことに特徴がある。現代の消費生活の在り方や、消費行動と資源・環境問題との関わりや結びつきを重視している。

２．レポート課題の構成案

以上のような「家庭総合」の特徴に配慮しつつ、構成案の作成にあたっては、まず、レポートの回数が問題になる。当初は、学習指導要領における上限の全12回を考えていたが、2003年度から「総合的な学習の時間」と「情報」の添削指導が家庭科教員に加わることになり、この業務を遂行するため、2002年６月のカリュキュラム委員会で全８回でレポートを作成することが決定した。そのため、旧教育課程の「家庭一般」では全10回で編集していたレポート回数の２回分を減らすことになった。広範囲の内容を含む「家庭総合」を、どのようにして８回のレポートに厳選してまとめるかを検討し、以下の３点について重視することにした。

第１は、前述したように、家庭科教員と本校生徒のアンケート結果を考慮して、「家庭総合」おける指導内容の重要度を参考にした。

第２は、生徒の体験学習の機会を少しでも多くしたいと考えているが、スクーリング時数が

8時間のため、レポート内容の不明な点などの質問や回答などで費やされるので、スクーリング時間には、計画的に実習を入れることができない。その代替として、レポートに実習課題を多く組みこむことした。

第3は、レポート課題の提出方法や設問方法についてである。これには多種多様な方法があるが、空欄回答方式、選択肢方式、記述方式、生活実態や文献調査方法、テレビ視聴、実習の記録、聞き取り調査（インタビュー）など、多様な課題や問題を組み入れ、実習・実験はスクーリング時だけではなく、家庭で体験できる実習を組み入れることにしたい。

このような視点を考慮して作成したレポート課題の構成案は、資料17の通りである。

資料17　2003年度「家庭総合」レポート課題の構成案

回数	学習分野	学習項目	提出期限	出題方法
1	人の一生と家族・家庭	家族・家庭とは 家族と法律 生活時間 男女共同参画社会 自分らしい生き方 テレビ視聴の感想	5月10日	空欄 空欄 生活実態調査 記述 インタビュー 感想
2	子どもの発達と保育・福祉	青年期の健康 生命のめばえ 乳幼児の身体的発達・生理的特徴 心の発達 生活習慣の形成と自立 保育分野に関しての新聞記事貼付	6月10日	記述 空欄 空欄 空欄 記述 調査・感想
3	高齢者の生活と福祉	高齢社会の現状 高齢者の心とからだ 自分の街の介護保険 高齢者施設への訪問・体験	7月7日	空欄 空欄 調査・記述 体験・感想
4	生活の科学と文化①	栄養と食品のかかわり 食品の選び方と安全 日本の食料事情 環境汚染と食物 食生活に関しての新聞記事貼付	8月2日	選択・空欄 選択・空欄 記述 調査・記録 調査・感想
5	生活の科学と文化②	栄養所要量と食品群別摂取量のめやす 家族の献立 調理の基本 調理実習の記録	10月8日	空欄・記述 記述 空欄

6	生活の科学と文化③	衣服の機能 衣服の素材 繊維製品の表示 衣服の手入れ 基礎縫いの実習 （技術検定４級の試験布を使って）	11月６日	空欄 空欄・調査 空欄・調査 空欄 実習・感想
7	消費生活と資源・環境	消費者の権利と責任 消費者信用 消費者問題 消費生活と資源・環境 自分の家庭のエネルギー調査 自分の家庭からはじめる環境保全	11月26日	空欄 空欄 記述 選択・記述 調査・記入 調査・記入
8	ホームプロジェクト	ホームプロジェクト	12月24日	写真・調査結果など記録

（注）右端・出題方法欄の「空欄」は「空欄回答方式」の略。

３．構成案作成の配慮事項

以下では、レポート課題の構成案作成において、特に配慮した点を述べておきたい。

第１回目の「自分らしい生き方」では、ライフコース設計の視点から、身近な周囲の人にインタビューし、自分の人生や職業を考える参考になるようにした。生徒の年齢が若年化しているので、生徒自身の進路やライフコースの目標を定める最善の機会になるようにしたい。

第２回目の保育分野に関しては、第４回目の食生活分野と同様に関連する新聞記事を貼付させ感想を述べさせるようにした。家庭内の問題も含めて社会全体としてとらえて欲しい分野である。

第３回目の「高齢者施設への訪問・体験」は、各市町村の福祉施設や医療施設の病院等を実際に訪問・見学を実施することにした。生徒は全県下に居住しているので、施設やサービス等の地域差などが明らかにされる報告等が期待できる。

第５回目の「調理実習の記録」については、「調理実習は学校ですべき」という観念をもっていたが、家庭で実習した料理を写真撮影して「調理実習の記録」に貼付することによって可能である。これは、山梨県立Ｄ高校のレポート課題（資料16を参照）に学び組み入れることにした。

第６回目の「基礎縫いの実習」では、家庭科「技術検定４級」の試験布を利用することにした。これも山梨県立Ｄ高校のレポートを参照にした。今まで、ミシンの取り扱いはスクーリングでは体験させてこなかったが、「家庭総合」では是非、実施したいと考えている。通信制教育は、教員と生徒との交流が難しいが、「実習・実験」を設定すると、初対面でも親しく話すことができるようになる。協力校でのスクーリングの場合も、２台のミシンを持参して実習を組み入れたい。この第６回目は「技術検定・被服４級」の練習と位置づけ、希望者には「技術検定・被服４級」を受験させ、資格取得への学習意欲を持たせたいと考えている。

第７回目の「自分の家庭からはじめる環境保全」では、ごみ問題に視点をおき、各市町村のごみの回収方法について調査させたい。

第８回は「ホームプロジェクト」であるが、これは自由テーマの体験学習である。この課題に取り組ませるための意義と実施方法については、年度当初から説明を加えて、理解させることが大切である。第１回目からどんなテーマについて取り組むかを考えさせながら、全回数のレポートを学習させていきたい。

次に、NHKのテレビ番組を利用して、学習の理解を深めていけるように、第１回目のみに、放送視聴の感想記述欄を位置づけた。本来ならば、全回レポートに感想記述欄を設けたいが、このテレビ視聴は学校が指定した用紙に感想をまとめて提出すれば、テレビ視聴２回につきスクーリング１時間が代替される。宮崎東高校としては、なるべくスクーリングに出席することを推進しているため、１回だけ番組紹介をして「感想」を求め、あとは生徒の自主性にまかせることにした。

今回の全８回のレポート課題として、独立して編成できなかった内容は住生活分野であるが、この分野は、高齢社会の問題や環境保全の内容に組み込めるのではないかと考えている。今後の検討課題としたい。

おわりに－研究成果と課題－

本研究の主要課題は、第１に、通信制課程における高校家庭科教育の実態について、その教育課程と学習方法の特徴を明らかにし、第２には、2003年度から実施される新教育課程における「家庭総合」のレポート課題の構成案を作成し提案することにある。

１．研究成果の概要

本研究を終えるにあたって、第１報及び第２報で明らかになった点を要約しておく。

① 高等学校における通信教育は、新制高等学校の設置とともに、1948年に通信教育部として全国の93高校に設置された。1955年には、通信教育のみで高校卒業の資格が得られるようになり、1957年には通信制課程の教育課程は、高校学習指導要領に位置づけられ、1962年に制度的には全日制課程、定時制課程と同様に高校の３本柱（課程）の一つとして対等に位置づけられた。

② 宮崎県では、1948年に宮崎大宮高校と延岡恒富高校に通信教育部を設置したが、1952年には延岡恒富高校は宮崎大宮高校に統合され、県立高校での通信教育は宮崎大宮高校の１校で実施された。1974年には、通信制課程と定時制課程をもつ独立高校として県立宮崎東高校が設置され、宮崎大宮高校通信制課程は廃止された。また、2001年度からは、県立延岡第二高校に通信制課程が新設され、県立高校通信制課程は２校となった。

③ 通信制高校の学習システムは、基本的にはレポート提出（添削指導）とスクーリング（面接指導）である。普通科のほか職業科を設置している高校もある。卒業年数は３年間以上で卒業所要単位を修得する単位制である。なお、宮崎東高校の場合、３年間で卒業予定生徒の平均的なレポート提出回数は、１年次が57回、２年次が68回、３年次が59回で合計184回になる。また、スクーリングは、３年間で最低45日以上であるが、スクーリング出席の多い生徒は、年間60日前後である。

④　全国の通信制課程を設置する96高校の家庭科教員に対し、通信制家庭科教育の実態と問題等を尋ねるアンケート調査を実施した。その結果、レポート課題の年間回数が最も多いのは12回で26校（53.0%）であった。次いで８回が10校（20.4%）であった。また、スクーリング時数は年間８回が最も多く、52校中の25校（47.1%）であった。

⑤　本校の県立宮崎東高校における「家庭総合」のレポート課題の構成案を作成した。本校では、従来は、必修科目「家庭一般」（４単位）と、選択科目「食物」（４単位）を開講している。「家庭一般」のレポート回数は10回で、スクーリングは８回実施している。しかし、2003年度以降の新教育課程では、「家庭総合」と「フードデザイン」を開講するもののレポート回数は削減して各科目ともに４単位につき８回になったが、スクーリングは10時間にして従来より２時間増やすことにした。レポート課題の作成にあたっては、（ア）新科目「家庭総合」の目標と内容、（イ）家庭科教員や生徒の意識調査結果、（ウ）収集したレポート課題の分析結果、（エ）体験的・実践的活動や、新聞記事にも関心を持たせ社会的視野を広げる、等に配慮して全８回分を作成した。

２．通信制家庭科教育の課題

家庭科教員に対するアンケート結果から、通信制家庭科教育の諸課題について、まとめておきたい。

第１は、「実習・実験」の取り組みについてであり、「自由記述」欄で一番多く言及されていた点である。通信制課程における実習は、レポート課題やスクーリング（年間指導計画）に組み込んで、しかも継続的な学習は困難であるが、最低１回の実習を組み込んで体験学習ができる機会が必要である。講義よりも実習を優先的に考えたスクーリングの内容を検討する必要がある。

第２には、レポート課題の内容とその特徴、添削の方法等についてである。通信制課程は全高校で同じ教科書を使用しているが、レポート課題の内容や回数等は、各高校で大きく異なっている。レポート回数が制限されるなかで、内容を精選しかつ生徒にとって充実感や達成感のあるレポート課題にするためには、全国の家庭科教員の体験と知恵を生かすことが最良の方法である。これは、他校のレポート課題を直接見聞することによって得られるので、レポート交換を２年に１回は行うことを提言したい。レポート交換は、それぞれの地区で開催される「全通研」大会を利用することができる。今回、19校のレポートを交換・収集したが、これは本校のレポート課題作成に有効で貴重な示唆を得ることができた。また、生徒の自学自習による通信制教育では、困難な点が予想されるが、地域の生活に根ざしたレポート課題を組み入れることも検討したい。

第３は、通信制高校で学ぶ生徒に対する配慮についてである。第１報で指摘したように、近年の通信制高校への入学者の多くは、勤労青少年ではなく、15歳から17歳の無職の青少年で、しかも、中学校では不登校であった生徒や全日制高校の退学者が大半を占めるようになった。そのために、様々な事情を抱えていることに配慮して、学習することの楽しさと継続できる意欲を喚起できるようなレポート課題やスクーリングの内容を考える必要があり、これは、家庭科教員の重要な責務である。さらに、レポートの添削指導は、単に正解の丸付けではなく、学習の意欲や努力を称賛して伝えることが大切である。通信制高校だからこそ、生徒の個性や気持ちを大切にしたレポート添削とスクーリングを実施していくことが重要である。家庭での自

学自習が、生徒自身の生活に直結していることを常に感じとってもらい、生活の知恵として、また知識として「生きる力」となるように努力していくことが求められている。

第4は、学習環境の物的・人的整備についてである。学校数や教室数の不足、及び専任教員の不足などである。宮崎東高校は、県立高校の中でも唯一、運動場のない学校である。また、教室は定時制課程の昼間部・夜間部と通信制課程が併用している。協力校におけるスクーリングは、教室や体育館を借用しているが、協力校での行事が優先されると、スクーリングを余儀なく変更されることがあり、教員も生徒も通信制教育は軽視されているという思いを払拭することができないこともある。したがって、学習環境を充実する取り組みを進める必要がある。

第5は、入試制度についてである。全日制高校では、入学定員割れが生じクラスを削減している今日、通信制課程への入学志願者は年々増加している。通信制高校への入学希望者増加の背景には、中学校からの不登校者や、基礎学力不足で全日制高校へ入学できなかった者、また、全日制高校からの退学者など、現代の教育問題が集中的にしわ寄せされ、これらを抱えた生徒たちが、最後の希望を託して受験してくるからである。本来、通信制教育は「いつでも・どこでも・だれにでも」開くとという教育理念であるため、受験者の全員を合格させ支援をしてきた。しかし、本校の宮崎東高校においても、2001年度から受験者が定員をオーバーしているために、入学選抜試験を行い不合格者を出さざるえなくなった。高等学校が義務教育並みに必要となってきている現在、何らかの理由で高等学校の教育を受けることができなくなった者が、再度、勉強したいと願うならば、全員にその機会を提供することが、今日の日本の教育に課せられていることではないか。定員オーバーのために入学志願者を選抜するのではなく、受け入れ側の学校制度を見直す方向へ改革する必要がある。そのための教員や教育予算の確保、施設・設備等の学習環境の整備などを、教育行政担当者にもっと要望する必要がある。通信制高校に勤務する教員も、教育行政担当者にそのことを理解してもらうために、通信制高校の実態と課題を提案する機会をつくる努力が求められているし、さらにまた、地域全体に通信制高校をピーアールする広報活動なども求められている。

最後になったが、ご多忙のなか調査に協力いただき、レポート課題を交換していただいた通信制高校および家庭科教員に厚くお礼を申し上げる。

（2004年4月30日受理）